

あきらめない

海南市立海南中学校 3年 杉 本 則 朝

「もういいや、無理」

僕はこれまで何度この言葉を言ってきたのだろう。勉強にしてもそう。小2で始めたサッカーも半年しか続かず、ゲームさえもクリアできなければすぐあきらめる僕。そんな僕が中学生になりました。

僕は部活動で野球部に入部しました。ルールも知らない状態で入部した初心者で、体力ありません。初めは頑張っていました。夏休みになると、暑さに負け、練習についていけなくなりました。僕はまた言います。

「もういいや、無理」

いつものように野球をやめたいと思うようになりました。そんなとき、友達に「お前サボってんのか！」などの言葉を投げかけられ、僕の精神が保てなくなり、なにもかもいやになった結果、学校も休むようになりました。

そして僕は、野球をやめたいと母に相談しました。すると母は一言、「後悔するよ」と言いました。僕はその時、あまり意味が分かりませんでした。続いて母は「最初から上手くいくはずない、自分のペースでいけばいい」と言いました。そのとき、僕はみんなと同じペースでついて行かなければいけないという思いだけでやってきたから、しんどいのだと気づきました。そこから僕は、自分のペースで練習しようと決めました。

まずは、ノックのボール渡しやキャッチャーの防具をつける手伝い、スコアラーとしてみんなのサポートをしました。みんなと同じ練習をせずにいることで僕は、みんなにまた「サボってんのか」や「ずるいぞ」と言われなにか心配でした。でもある日、チームメイトは思いがけず「ありがとう」と言ってくれたのです。チームメイトは僕のことをわかってくれていると気づいた瞬間でした。安心しました。もう一度みんなと一緒に頑張ってみようという気持ちがわいてきました。そして、段々とみんなについて行けるようになり、去年の8月からみんなと同じように練習に参加するようになりました。練習はきつく、しんどいことはありますが、大好きなチームメイトが僕のことを支えてくれていると思うだけでとても楽しく練習に取り組むことができました。しかし実力はまだまだで大会や練習試合での出番は少なく、ベンチでスコアをつけるのが僕の仕事でした。

それでもみんなの役に立てていると満足していました。ベンチが僕の活躍する場所だったのかもしれません。

そして迎えた4月12日、学校のグラウンドで強豪日高中学校との練習試合がありました。1試合目はいつものようにスコアをつけて応援していました。3対4で惜しくも逆転負け。そして2試合目、1試合目でレギュラーが2人怪我をしてしまいました。「もしかして僕の出番かな」と思い、ドキドキしていました。そこで監督が「則朝、いくぞ」と声をかけてくれました。

「8番レフト、僕」2回裏ノーアウト満塁。絶好のチャンスに僕の出番が来ました。むっちゃ緊張して「どうしよう」と心の中で何度もつぶやいていました。簡単にツーストライクと追い込まれました。「三振だけはしない」3球目、僕は来たボールを思いっきり振りぬきました。打球はレフトの頭上を越え、タイムリーツーベースで2点入りました。二塁ベース上の僕に、ベンチでは全員が立って祝福してくれました。すると後ろから、グラウンドで練習していた陸上部もみんな大きな拍手をしてくれたのです。涙が出るぐらいうれしい瞬間でした。僕の人生初ヒットでした。

あのとき野球をあきらめていたら、こんな感動は味わえなかったと思います。この作文を書いているとき、先生が次の詩を紹介してくれました。

おそろしいこと

困難にぶつかることよりも
人にうらぎられることよりも
つらいことよりも
悲しいことよりも
苦しいことよりも
もっとおそろしいのは
あきらめてしまうこと
そこですべてが終わってしまうから

あのとき、あきらめなかったから、今、僕はここにいるのです。